

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：32657

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K01086

研究課題名（和文）第一次世界大戦前のドイツ民衆の戦争肯定論形成のモデル化

研究課題名（英文）Modelling the formation of war positivism among the German people before World War I.

研究代表者

中島 浩貴（Nakajima, Hiroki）

東京電機大学・理工学部・教授

研究者番号：00599863

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：第一次世界大戦以前に戦争がどのように描かれ、民衆がそれをどう受容したのかを考察することにより、当時のドイツ社会で仮想敵国への敵意や戦争に対するイメージがいかに増幅されたかを明らかにした。

軍事著述家や民間の著作類を分析するなかで、第一次世界大戦以前に戦争が様々な文脈や意味をもつ場として機能していた状況が明らかとなった。また、ドイツの戦争認識が他国の戦争実践や状況認識、対応を比較検討するなかで受容されていった状況が明らかとなった。

大衆小説などのポピュラー・カルチャーのレベルで、民衆が戦争を受け入れる素地が形成され、「社会の軍事化」が中長期的なスパンで構築されていった状況が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

第一次世界大戦前のドイツを事例として、戦争を肯定的にとらえていく世論形成がいかなるメカニズムで形成されていくのかという基礎的構造の一端が明らかとなった。戦争についての語りや社会で一般的なものとなり、戦争を肯定する主張が受け入れられていくプロセスとして、戦争学が専門化していくプロセスと並んで、大衆メディアで戦争情報が積極的に受容される素地が構築されていった状況がみられる。また、戦争観を共有していくプロセスのなかで、他者認識の重要性が明らかとなった。ドイツの事例をもとに、一般的な戦争防止の観点から考察するならば、多国間の戦争肯定論の相互エスカレーションを防ぐ可能性が明確になるとと思われる。

研究成果の概要（英文）：This study examined how war was portrayed in Germany before the First World War and how the public accepted it. It revealed how hostility towards the virtual enemy and images of war were amplified in German society at the time.

(1) Analysis of military and civilian writings reveals how war functioned as a site of different contexts and meanings before the First World War. It also revealed a situation in which German perceptions of the war were accepted through comparisons with war practices, perceptions of the situation and responses of other countries. (2) At the level of popular culture, such as popular fiction, the groundwork was formed for the public's acceptance of war, and the 'militarisation of society' was constructed over the medium to long term.

研究分野：ヨーロッパ史

キーワード：ドイツ史 軍事史 ふつうの人々 軍事雑誌 在郷軍人会 軍事団体 近未来戦争小説

1. 研究開始当初の背景

本研究は 19 世紀後半から第一次世界大戦前夜までのドイツに焦点を当て、この時期に軍人著述家や民間の作家が大衆向けの著述で近未来戦争をどう描き、それを民衆がどのように受容したか考察することにより、当時のドイツ社会に仮想敵国への敵意や戦争に対するイメージがいかに増幅されたかを明らかにしようとした。具体的には、第一に、軍事著述家が一般読者を想定して著した著作類を分析するとともに、結社・団体などの公共空間で彼らが国民皆兵思想と近未来戦争への心構えをいかに普及させたのかを分析しようとした。第二に、戦争を描いた当時の人気大衆小説を渉猟し、ポピュラー・カルチャーのレベルで民衆がどのような戦争像や敵国イメージを持ったのかを分析対象とする。平和と繁栄を謳歌していた西欧で、実体験の乏しい戦争肯定のメンタリティが蔓延した事情を民衆レベルで解明することは、戦争肯定的な世論形成の背景を考察するうえでも普遍的な視点を導き出すことを意図していた。

2. 研究の目的

戦争肯定論に結びつく世論形成のプロセスを解明し、地域や時代を超えた軍事的風潮、戦争肯定的風潮の比較枠組みを作ることが目的である。このために、軍事専門家が一般向けに残した著作や大衆向けの小説で戦争に関する言説が形成されて行った状況を分析し、当時の新聞や雑誌に目を向け、どのような言説が戦争肯定論を拡大するうえで中心的な影響があったのかを明らかにする。さらに、言説の伝達と拡散の場でもあった地域の在郷軍人会などの日常的活動に目を向けることで、言説発信者とその受け手の軍事的メンタリティの拡大プロセスを分析する。これにより、戦争肯定論が拡大していく問題点を明示することが可能となる。

3. 研究の方法

本研究では、主に 19 世紀後半から 20 世紀初頭のドイツを対象として、戦争肯定論が世論に膾炙していった過程を明らかにするために、軍人著述家の一般向け著作の収集・分析、大衆娯楽的戦争小説の収集・分析、ポピュラー・カルチャー形成の場である結社・協会の活動とそこでの軍事的世論形成過程の考察、新聞記事の収集・分析による当時の世論の動向調査、を行った。はおもに中島が担当した。軍人著述家が民衆向けに著したものがどのような性質のものであったのかという実態と時間軸の変化を確認する。重要な軍事雑誌である『軍事週報』や『陸海軍年報』には近未来戦争に関する言説が含まれていることは確認しているが、大衆啓蒙目的で書かれた冊子類の収集を行った。これら収集史料をもとに、軍事のハイ・カルチャーとでもいふべき軍人著作家の言説から、大衆への影響範囲とその限界を対象とした。はおもに丸島が担当した。元軍人、非軍人著述家による大衆向け小説における一般的動向を分析した。戦争認識の相違が多様性を持っていた一方で、どのように相互に影響を及ぼしていったのかを明らかにしようとした。民衆にとりわけ受け容れら

れやすかった戦争観の形成である。 は共同で研究に当たる。地域に根差した在郷軍人会関係の史資料が確認されており、19世紀後半から20世紀初頭の在郷軍人会の実態を把握する。また、当時の戦争肯定的世論が垣間見られるものとして、新聞記事や大衆小説の普及度を知るために書評のたぐいを収集・分析する。以上によって、ポピュラー・カルチャーの視角から戦争を肯定する言説が生じ、普及したプロセスを明らかにするという、計画を立てた。

4. 研究成果

(1) 研究発表、シンポジウムについて

本研究では、定期的に科研集会(Zoom開催を含む)を用いて情報交換を行った。そして、著作、論文、研究報告、シンポジウムの開催などで研究状況の公開と、さらなる研究の進展を図った。

2019年6月には、本研究の前提条件となる研究を整理し、『国民皆兵とドイツ帝国 一般兵役義務と軍事言説 1871 - 1914』彩流社、2019年として出版した。2019年8月から9月には、ドイツ出張を行った。ベルリン国立図書館(Staatsbibliothek zu Berlin)およびブランデンブルク州ポツダムのドイツ連邦軍軍事史・社会科学研究所(Zentrum für Militärgeschichte und Sozialwissenschaften der Bundeswehr; ZMSBw)で史資料を入手できた。

2020年以降、世界的なコロナウィルスの蔓延によって、当初予定していた訪独調査が難しくなったため、研究計画を変更し、2019年に収集した史資料の分析に力を入れた。

くわえて、研究報告、シンポジウム、書評会などで、研究内容の発表、告知に努めた。丸畠「作家ルイ・シュナイダー(Louis Schneider)と軍事雑誌『兵士の友(Soldatenfreund)』下からの軍国主義の原風景か？」(日本クラウゼヴィッツ学会研究大会、2020年10月17日)、中島浩貴「軍事的学知の公共圏 1870年代におけるドイツ語圏軍事文献の射程」(基盤研究A「19世紀を中心とした軍事的学知をめぐる人と書物の交錯」研究集会、2020年7月18日)、「書評会 中島浩貴『国民皆兵とドイツ帝国 一般兵役義務と軍事言説 1870~1914』(彩流社・2019年)」(西洋近現代史研究会、2020年10月31日)。2021年には、「戦争の前に 第一次世界大戦以前の民間の軍事論」(日本クラウゼヴィッツ学会研究大会、2021年10月16日)というシンポジウムを開催し、深町悟氏による「イギリスの侵攻小説」、鈴木重周氏による「ユダヤ系フランス人の対独復讐論」、丸畠「ドイツの兵隊もの小説」という3つの国の比較研究を行った。第一次世界大戦前の戦争肯定論が極めて多様性を持ち、国や時代ごとの特徴を持っていたこと、また論者の置かれた社会的背景がその主張に大きく関係してくることを示すことができた。

2022年度は、中島浩貴「第一次世界大戦前のドイツの民間人と戦争論」(シンポジウム「大戦とプロパガンダ」、JSPS科学研究費助成事業(19K13123)「英国における侵攻小説と第一次世界大戦のプロパガンダ的類似性の研究」、代表者：深町悟、2023年3月22日)はその

成果である。加えて、第一次世界大戦前の技術的問題に着目するなかで、民間人向けの「軍事的なもの」ないし「軍事言説」においても共通する価値基準、判断基準につながる識見を得ることができた。

最終年度には、これまで収集した史資料の分析を進め、論稿を投稿し、査読に応じた改稿を進めている。また、「ドイツ語圏軍事雑誌の公共圏：1870年代を中心として」(軍事史学会第127回関西支部、2024年1月27日)では、軍事的認識の専門化が進行してくる前提条件を整理した。第一次世界大戦期においても、深町聡氏に「大戦期の英国のプロパガンダについて」(中島科研集會、2023年7月9日)において、第一次世界大戦以降のドイツに対するイギリスのプロパガンダと小説家たちの関連性についての問題提起をいただいた。

(2) 明らかになったこと、研究成果の内容

2020年度以降、新型コロナウイルスの蔓延により、海外史料調査等の予定を変更せざるを得なかったが、以下のような成果があった。

1 19世紀ドイツにおける軍事ジャーナリズムの形成と発展にかんする基礎研究

軍事専門雑誌と言え、普通注目されるのは『軍事週報』をはじめとする高級軍人向けの専門誌であるが、19世紀前半期にようやく誕生した下士官・兵士向けの雑誌『兵士の友』に注目した。これは、本プロジェクトのテーマである近代のドイツにおける戦争肯定的風潮を知るのに、軍隊の草の根からの考察が必要と考えたからである。研究期間中の分析は19世紀中葉までしか進めなかったが、歴史上の戦争体験を美化する記事の他、よき兵士＝よき市民という認識を定着させようという努力が多く見られ、帝政期以降ににわかに高まりを見せる社会の軍事化の原風景をそこに見ることができた。

2 いわゆる「兵隊もの」小説の分析

以前から関心を持っていた19世紀中葉のドイツにおける大衆の人気作家F.W.ハックレンダーの軍隊・兵士をテーマにした小説を読み進めるとともに、その出版事情や時代背景なども調査した。そして、ハックレンダーは軍部と結びついて民衆の間で軍事的なものの価値を高めるためのプロパガンダ装置として活動したわけではなかったが、その素朴な軍隊への愛着が、19世紀後半の社会における軍事化の風潮にマッチしたことから、結果として軍隊を市民社会にとって親しみの持てるものにするのに貢献したことを、明らかにした。

3 19世紀前半期におけるプロイセンにおける国民国家の時代の下士官像の模索

国民軍隊における下士官という地位の重要性に着目した。国民軍隊では、下士官は「軍隊を支える屋台骨」と位置づけられ、兵役義務をつうじて軍隊を体験した青年男子の精神的教化にも大きな役割を果たした。そこで、下士官が社会の軍事化に与えた影響を明らかにする第一歩として、本プロジェクト期間中には、19世紀前半期のプロイセン軍で下士官の役割

がどう論じられ、位置づけられていったかを明らかにした。

4 19世紀後半から20世紀初頭におけるドイツにおける大衆向け軍事表象の多角的検討
帝政ドイツにおけるさまざまな戦争の表象を通して、戦争や軍事的価値観がどのように受容されていったのかを分析することができた。個別の戦争を通じて、普墺戦争、日露戦争を通じて、専門家ばかりが大衆レベルでも軍事理解が共有されていったことや、ドイツ国防協会の会報『国防』の分析のなかで、第一次世界大戦前の民衆向け戦争肯定論のメカニズムが明らかになってきた。さらに、本研究で、イギリス、フランスとの比較を行った結果、今後の研究の進展においてもプロパガンダを問い直すことが、言説分析においても有意義な視点をもたらすことが判明した。

5 ベルリン国立図書館およびブランデンブルク州ポツダムのドイツ連邦軍軍事史・社会科学センターで、史資料の調査を行ったことで多くの実りを得た。当地での調査では、ドイツにおける在郷軍人会ないし国防協会に関する研究、論文、諸研究の収集に加えて、第一次世界大戦以前の当該団体会報などの出版物を閲覧できた。これらは、現在でもオンラインでの入手ができないものである。くわえてドイツ軍事史研究・社会科学センターの複数の研究者と直接意見交換を行う機会があり、今後の研究交流に寄与しうるつながりができた。

第一次世界大戦前のドイツの戦争肯定論を分析するうえで、19世紀初頭から中盤にかけての一般民衆を対象とした社会の軍事化がその背景として徐々に形成されていった状況から、第一次世界大戦直前期における軍事的諸情報の大衆化に至るまで、戦争肯定につながる社会状況の土台となる様々なバックボーンを認識することができた。

特に、第一次世界大戦直前期の変化としては、他国の情報を増幅するメディアを通じての相互イメージの増幅作用が大きな役割を演じていたことが明確となった。特に、フランス、イギリス、日本といった他国のイメージ、軍事や戦争の状況認識がドイツの戦争肯定論形成の過程で大きな役割を果たしていることが見えてきた。くわえて、同時代に進行する軍事の専門化・精緻化の一方で、大衆レベルにおいても軍事や戦争に関する強い関心が生まれ、それが他国との比較分析によって正当化されていく状況に注目する必要性が出てきた。今後はさらに多国間の関連性に重きを置いた分析を行っていく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 中島浩貴	4. 巻 32
2. 論文標題 第一次世界大戦前の航空機言説と軍事的技術評価の形成	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 戦略研究	6. 最初と最後の頁 3-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 丸島宏太	4. 巻 第31号
2. 論文標題 忘れられたプロイセン将軍カール・フォン・デッカー――般兵役義務の軍隊と国民の教化	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 敬和学園大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 45-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 中島浩貴	4. 巻 第57巻4号（通巻228号）
2. 論文標題 ドイツ軍事雑誌における日露戦争の受容	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 軍事史学	6. 最初と最後の頁 78-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 丸島宏太	4. 巻 10
2. 論文標題 作家ルイ・シュナイダー(Louis Schneider)と軍事雑誌『兵士の友(Soldatenfreund)』 下からの軍事化の原風景か？	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 世界史研究論叢	6. 最初と最後の頁 20-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中島浩貴	4. 巻 56
2. 論文標題 「兄弟戦争」としての普墮戦争	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 軍事史学	6. 最初と最後の頁 89-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丸島宏太	4. 巻 102
2. 論文標題 研究会報告要旨「19世紀ドイツの兵士の世界 規律化と国民化」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『近現代史研究会会報』	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中島浩貴
2. 発表標題 第一次世界大戦前の軍事文化 民間の軍事文化を中心に
3. 学会等名 日本クラウゼヴィッツ学会月例研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中島浩貴
2. 発表標題 第一次世界大戦前の軍事と技術 航空機言説を中心に
3. 学会等名 2023年度日本クラウゼヴィッツ学会研究大会シンポジウム「戦争とテクノロジー...歴史、現在、未来」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中島浩貴
2. 発表標題 第一次世界大戦前のドイツの民間人と戦争論
3. 学会等名 シンポジウム「大戦とプロパガンダ」、JSPS科学研究費助成事業（19K13123）「英国における侵攻小説と第一次世界大戦のプロパガンダ的類似性の研究（代表者：深町悟）」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 丸島宏太
2. 発表標題 ドイツの兵隊もの小説
3. 学会等名 日本クラウゼヴィッツ学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 丸島宏太
2. 発表標題 作家ルイ・シュナイダー(Louis Schneider)と軍事雑誌『兵士の友(Soldatenfreund)』 下からの軍国主義の原風景か？
3. 学会等名 日本クラウゼヴィッツ学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中島浩貴
2. 発表標題 軍事的学知の公共圏 1870年代におけるドイツ語圏軍事文献の射程
3. 学会等名 基盤研究A「19世紀を中心とした軍事的学知をめぐる人と書物の交錯」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中島浩貴
2. 発表標題 ドイツと戦略
3. 学会等名 日本クラウゼヴィッツ学会研究大会シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中島浩貴
2. 発表標題 軍事的な知の範囲 第一次世界大戦前の軍事雑誌を中心に
3. 学会等名 日本クラウゼヴィッツ学会定例研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 丸島宏太
2. 発表標題 小シンポジウム「ヨーロッパの戦争・軍事博物館の動向」司会
3. 学会等名 第69回日本西洋史学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 丸島宏太
2. 発表標題 大使館付き在外武官（陸軍、海軍）についての中間的まとめ
3. 学会等名 科研(A)「19世紀を中心とした軍事的学知をめぐる人と書物の交錯」研究集会（代表：谷口真子）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 丸島宏太
2. 発表標題 軍隊の内面指導Innere Führung・精神教育と軍事・戦争博物館
3. 学会等名 科研(B)「戦争の「歴史化」を考える 「戦争の消費」と戦争認識の変化」研究集会(代表:佐々木真)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中島浩貴
2. 発表標題 書評会 中島浩貴『国民皆兵とドイツ帝国 一般兵役義務と軍事言説1871 - 1914』
3. 学会等名 西洋近現代史研究会(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中島浩貴
2. 発表標題 ドイツ語圏軍事雑誌の公共圏: 1870年代を中心として
3. 学会等名 軍事史学会第127回関西支部(招待講演)
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 新谷 卓、中島 浩貴、鈴木 健雄	4. 発行年 2021年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 218
3. 書名 歴史のなかのラディカリズム	

1. 著者名 中島 浩貴	4. 発行年 2019年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 270
3. 書名 国民皆兵とドイツ帝国	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	丸島 宏太 (Maruhata Hiroto) (20202335)	敬和学園大学・人文学部・教授 (33104)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------